

## 卒業期看護学生の看護技術の経験と自信度

新潟医療福祉大学看護学科・袖山悦子  
中山和美, 宇田優子, 坪川麻樹子

## 【背景】

看護学生が、卒業時に一人でできる看護技術は少なく、リアリティショックを受ける者や早期退職をする者もいることから、看護技術の種類と卒業時の到達度が厚生労働省から提示された。A大学では、大項目18と中項目118の学習項目から、到達度Ⅰ(単独で実施できる)、到達度Ⅱ(指導のもとで実施できる)に該当する項目を定めた。先行研究<sup>1)</sup>では、実習経験のある技術の自信度は高いが、実習経験の少ない診療の補助技術の自信度が低いことが明らかとなった。A大学の平成24年実態調査(以後、24年調査とする)も同傾向だった。本調査では、技術習得に向けた若干の示唆が得られたので報告する。

## 【方法】

調査方法:平成25年度卒業見込みのA大学看護学科4年生を対象に平成26年2月に集合自記式質問紙調査を行った。

調査内容:A大学看護学科の看護技術の学習項目である大項目18、中項目118から地区診断・地域保健活動に関する技術を除いた大項目17、中項目112である。実習での経験は、「一人で実施した」「指導者と共に実施した」「見学した」「未経験」から1つを選択してもらった。看護技術の自信度については、「自信がある」「やや自信がある」「やや自信がない」「自信がない」から1つを選択してもらい、卒業時到達度Ⅰ・Ⅱに該当する中項目(以後、項目とする)66を調査対象とした。

分析方法:看護技術の経験割合(以後、経験率とする)は、「一人で実施」「指導者と共に実施」「見学」を、<実習経験あり>とし、「見学」を含めた経験割合と、含めない経験割合の2群に分けてSPSSで単純集計した。看護技術の自信の割合(以後、自信度とする)は、「自信がある」「やや自信がある」を、<自信がある>、「やや自信がない」「自信がない」を、<自信がない>の2群に分けてSPSSで単純集計した。経験率(%),自信度(%)が70%以上を高い,30%未満は低いとした。

本調査は、研究の意図を文書と口頭で説明し、不参加でも不利益は無いことを説明して同意書で同意を得た。

## 【結果】

有効回答率は87.8%(72名)だった。

1. 経験率の高い項目:項目数は、36(54.54%)だった。大項目の経験率の平均は、【環境調整技術】94.5%、【清潔・衣生活援助技術】90.3%、【安全管理の技術】86.8%、【安楽確保の技術】87.9%で、【活動・休息援助技術】78.1%だった。大項目数は24年調査と同数だった。「見学」を含めた経験率が高い項目数は、63と24年調査の51より多かった(表1)。
2. 経験率の低い項目:経験率の低い項目数は、11(16.7%)だ

った。大項目の平均は、【与薬の技術】29.2%だった。「見学」を加えた経験率が30%未満の項目は、0だった。

3. 自信度の高い項目:項目数は、41(62.1%)だった。そのうち、「見学」を含めた経験率が高かった項目は、7(10.6%9)あった(表1)。自信度の大きい項目の平均は、【安全管理の技術】94.5%、【環境調整技術】93.1%、89.0、【感染予防の技術】79.1%、【清潔・衣生活援助技術】85.2%、【安楽確保の技術】【活動・休息援助技術】79.1%、【症状・生体機能管理技術】70.7%であった。
4. 自信度の低い項目:「膀胱留置カテーテルの固定」27.83%、「心電図」20%だった。24年調査では、同項目共に5%だった。
5. 経験率と自信度:経験率が高い項目36は、自信度も高い項目が34(84.4%)あった。「沐浴」、「循環機能の援助」は、自信度が70%未満だった。24年調査より経験率・自信度が高い項目数が増えた(表1)。

表1 経験率・自信度の高い項目数(見学)

	平成24年	平成26年
経験率が高い	51(17)	63(27)
自信度が高い	21(0)	41(7)

## 【考察】

本調査では、「見学」を含めた経験率が自信に繋がっている項目がみられた。「見学」が自信に繋がるには、学生に知識や学内演習などでの準備状態があること、事後学習が適切に行われることが求められる。本調査の対象学生は、カリキュラム改正により看護実践能力を高めること目的とした統合実習を履修している。3年次の実習経験や学習の成果が、4年次の統合実習で効果的に働き、自信になったのではないかと考えられる。今後は、本調査での「見学」が自信に繋がった項目の背景を検証し、授業内容や演習を工夫し、卒業時の到達度Ⅰ・Ⅱについての「自信がある」割合を高めることが課題である。

本調査は、24年調査と同様に、診療の補助技術の自信度が低かったが、高塚<sup>2)</sup>らの調査によると卒業時に習得しておきたい看護技術には、点滴に関する技術が多かったとある。学生が点滴薬剤の混注や点滴準備を実習するのは難しいが、「見学」は可能である。そのためには、臨地と連携し、学生の「見学」のチャンスを拓くことが必要である。

## 【結論】

実習での実習経験が自信度に繋がっていたことから、「一人で実施・指導者と共に実施」に加え、「見学」も積極的促していく体制が必要である。

## 【文献】

- 1) 峰村淳子:看護学生の卒業時における看護技術到達度の実態(第5報),東京医科大学看護専門学校紀要,24(1),1-12,2014.
- 2) 高塚綾子,他:看護系大学卒業後の看護技術実施状況と課題,聖母大学紀要, No. 7, 31-40, 2010.